

令和6年度第2回神戸市発達障害児（者）支援地域協議会代表者会 議事要旨

日時：令和7年1月23日（木）14時～15時50分

場所：センタープラザ西館6階 9号会議室

1. 議題

(1) 主な事業の状況報告

- ① 就学前の子どもの発達相談支援体制の充実（「こべっこ発達専門チーム」）
- ② 神戸市地域障害児支援体制強化事業について
- ③ 障害児通所支援事業所巡回支援事業について
- ④ 計画相談及び補助事業の状況について
- ⑤ 特別支援教育の現状～神戸市立高校における通級指導教室の取組～
- ⑥ 依存症家族教室について
- ⑦ 改正障害者差別解消法施行を受けて
- ⑧ ペアレント・メンター養成事業について

(2) 情報提供

発達障害等のある生徒に対する各種支援に関する研修について

(3) 意見交換

2. 主な意見

(1) 主な事業の状況報告

- ・障害児通所支援事業所の巡回支援を任されていたが、ほとんどの事業所が真摯に取り組んでいると改めて感じた。しかし、事業所の中には、事業所内で解決することができないのではないかと思うこともあり、合同研修会などがあれば改善できるかと思った。
- ・非常にたくさんの児童発達支援事業所、放課後等デイサービス事業所ができていますが、事業所同士の研修といったネットワークづくりについて、行政から働きかけることは可能か。
- ・神戸市地域障害児支援体制強化事業について、研修やケース検討会を通じていろいろな事業者を知ること、次へつなぐ際に安心感を持てると感じた。児童発達支援センターの支援体制が整うことにより、よりよい療育や地域の方々へのサービスにつながっていくという実感を持っている。
- ・児童発達支援センターに求められていることはいろいろあるが、力には限りもある。まず身近なところから検討してもらいたい。
- ・放課後等デイサービス事業所の横のつながりとして、区ごとにネットワークをつくるような動きがあれば教えてほしい。
- ・西宮市内で児童発達支援事業を実施しているが、自立支援協議会に参加するメンバーも限られており、民間においても熱意のある人は限られている。ある程度行政機関の支援も受けながら、継続的に広く参加できる場を維持していくことが必要ではないか。年間20件ずつ事業所が増えている中、ネットワークづくりは引き続き継続してもらいたい。

- ・こべっこ発達専門チームについて、西区で実施され一年以上経つが、特に未就園児は情報や相談先も少なく、区役所でワンストップで相談できることは非常にありがたい。ぜひ、神戸市全域へ広げてもらいたい。

(3) 意見交換

【欠席委員からの意見】

- ・神戸市地域障害児支援体制強化事業について、事業所が増えるのはよいが、質の向上、均質化が大事である。各地域で重要さを理解し、そういった研修や取り組みが進めばよい。また、居宅訪問型児童発達支援を実施している事業所が市内に1か所あるが、どのような子どもが利用できるのか。発達障害が原因で外出できない子どもも、在宅支援として活用できるようになればよい。
- ・計画相談について、大人になってから計画相談が増える理由は何か。子どものセルフプランが多い理由は、利用したいが相談機会がないからか。原因を分析して、別のアプローチを検討する必要があるのではないか。
- ・ペアレント・メンター養成事業については、発達障害児の子育て経験者がピアカウンセリング的に、保護者が抱える同じつらさを共有し、保護者の孤立感をいかに防ぐかということが大事であり、そこをはっきりと認識し、事業を進める必要がある。
- ・依存症家族教室はよい取り組みである。発達障害は興味関心の幅が狭いという特性があり、依存に代わるものを見つけることが難しいと感じている。教室が活用しやすいものであることを願う。
- ・神戸市地域障害児支援体制強化事業・巡回支援事業について、専門家が入らなくても、事業所同士がお互いに困りごとや支援事例を共有できるような情報交換の場があればよい。
- ・計画相談について、意識が高く自分で調べる力がある保護者はよいが、日々の対応で疲弊している保護者も少なくない。計画相談を知らない保護者も多く、周知の工夫が必要ではないか。
- ・改正障害者差別解消法について、合理的配慮は自分で申し出る必要があるが、診断はなくても困っている人、周囲に合わせ過ぎてしんどくなる人がいる、ということを理解することが必要である。「少し変わっているが、できているところがあればよし」という考えを持つ人が一人でも周りにいれば二次障害にはならない。地域、学校、職場など、本人がホッとできる場所や理解者がいればよくなる。周囲の気づきも大切である。

【代表者会での意見】

- ・自閉スペクトラム症が背景にありながら、大学を卒業したという方を何人も見てきた。高等教育を受けている方が、その後の就労でつまづくことが多いという経験があるが、その辺についてご意見を伺いたい。
- ・個々のケースによるが、クローズで就労される場合は、周囲のフォローが得られず、そこでつまずきを感じる方もいる。企業側にも求める能力、人物像があり、学生と企業の求める基準が合っているところを探し出すことが一番難しい。ハローワークでは、その人にあ

った求人がない場合は、兵庫障害者職業センターや医療機関など、専門機関のアドバイスを受けながら個別に開拓している。

- ・学歴ではなく、今何ができるかということが就労においては大切であり、そこを小さい時からしっかり保護者に伝えるという教育体制が必要ではないか。幼稚園の頃から見ている子どもだが、京都大学へ進学し博士号まで取ったが就労につながらず、福祉手帳を取ったという例もある。企業の期待に見合う能力があるか、こどもの育つ過程で保護者に理解してもらうことが必要だと感じる。
- ・学校にいる間に様々なアプローチをすることは非常に重要である。ただ、30年前に比べると随分理解は進んでいると感じる。以前は、30歳、40歳、50歳になって初めて発達障害と診断され、そこから支援を開始する方が多かったが、発達障害者支援法が施行されてからは、幼い頃に診断され、継続した支援を受けている方も増えており、少しずつ状況は変わってきているのではないか。
- ・資料の9頁に高校における通級指導教室の生徒数の推移があるが、中学で通級指導教室を経験していない生徒が増えている。これは暗数の多さを示すものではないかと思うが、やはり先生方の気づきが重要ではないか。義務教育から大学までは何らかのサポートがあるが、その後はいきなり自分自身が向かい合うことになる。多くのケースを見ているが、しんどい思いをしている方は、30代ぐらいまでうまくいかなくなり辞めており、社会人に対する早めのサポートも課題と思っている。
- ・企業も福祉サービスをしているわけではなく、企業が存亡をかけてチームとして機能するために必要な人材を採用しており、そこに自分自身を合わせていくことは当然必要である。どうやって自分の有用性をアピールするかは難しいと思うが、早い段階から何か手を打っておくことが大事ではないか。
- ・これまでの意見に反するかもしれないが、オープン就労とクローズ就労だと、クローズ就労を勧めることもある。給与が安い、昇進しないなど、障害者雇用で就労することが、本人にとって有利でないこともある。定着支援も差があると思うが、一つの理念型としてそういう支援をされていると思いながら聞いていた。
- ・神戸市地域障害児支援体制強化事業について、事業所間の連携の話があったが、とても大事なことだと思う。医療では、医療安全加算というものがあるが、同じ病院同士が相互指導し、お互いに高め合っている。そのように相互に検証する体制を連携の中で設けていくと、お互いの質の向上につながり、行政としてあまり労力を使わなくてもやっていけるのではないか。
- ・改正障害者差別解消法の説明で思ったが、体験型の学習があまりない。中学生のトライやるウィークなどで、障害のある方の働いている姿や生活している姿を見る体験があれば、障害のある方を身近に感じることができ、理解してもらえるのではないか。体験学習は、差別解消に向けて重要な取り組みだと思う。
- ・12月にかかりつけ医等発達障害対応力向上研修が実施されたが、地域の小児科の先生方と児童発達支援センターがうまく連携できればよいと思う。
- ・神戸市医師会では、医療的ケア児のネットワークづくりを始めているが、専門家ではない

一般の小児科医が、発達診断の窓口になれない状況が続いている。各地域の支援センターと開業医が勉強会を通じて、お互いに話し合える環境が必要ではないか。

- ・障害児通所支援事業所巡回支援事業について、5年計画で206か所実施されているが、事業所は400か所あり、毎年20か所増えているという状況は心配である。実際に放課後等デイサービス事業所でも、支援方法に不安を持っている方はたくさんいると思う。まずは事業所同士がつながり合い、顔が見える状況で、お互いのスキルアップを考えていければよいのではないか。
- ・市立高校の通級指導教室の話があったが、最近は通信制高校やサポート校も増えている。特別支援学校はある程度就労に向けたカリキュラムとなっているが、通信制高校やサポート校の就労支援について情報は得ているのか。高校を選ぶ時は多様な選択肢があるが、その先の就労支援が上手く受けられるのかと思う。
- ・自分たちのこどもが小さい頃と違い支援は充実しているが、感覚過敏についてはあまり周知されていない。集団生活の中でしんどい思いをしているので、その辺りの理解も進んでほしい。
- ・学習の場ではICTの活用が進み、授業が分かりやすくなったというこどもが増えているが、図書室を利用する際に、紙の本は使用しづらいという声を聞く。図書室においてもICTの活用が進めばよいと思う。
- ・今、LDのこどもがすごく増えている。学習障害のこどもたちは評価も難しく、普通の医者では診ることができないが、学校では気づくと思うので、学校の中での支援方法をスキルアップするよう、教育委員会で検討してもらいたい。